

# 高大連携・学内連携による異文化理解の取組

高校生・大学生と留学生別科生との交流からの一考

Efforts for Cross-cultural Understanding by High School -University  
Collaboration and On-campus Collaboration  
: Perspective on the Interaction between Japanese High School and  
University Students and Foreign Students of Japanese Language Course

虫賀 文人

## 要旨

大学内における日本人学生と留学生との交流は進んでいないという現状がある。また高大連携という観点からすれば、日本の高校生と大学で学ぶ留学生との交流も考えられるが、こうした取組も進んでいない。現在、新型コロナウイルスの感染拡大により、留学生の対面での学びの機会は乏しく、日本人の大学生や高校生にとっても海外留学や海外研修旅行の機会が減少している。このような状況下において、日本人学生と留学生との交流は貴重な機会といえるはずである。両者の交流が進めば、日本に居ながらにして国際感覚を養うことができるチャンスになる。

本論文では、日本人の高校生や大学生と留学生別科生との「学び合い」を実施することで、異文化理解教育を進める方策について考察する。

**キーワード**： 高大連携    学内連携    異文化理解    新型コロナウイルス    「学び合い」

## 1. はじめに

2020年度当初からの新型コロナウイルスの感染拡大は、外国人留学生の入国を大きく制限することとなった。また、日本人大学生や高校生の海外留学や海外研修旅行の機会も奪われていった。新型コロナウイルス感染拡大のピーク時には、本学留学生別科でもリアルタイムオンライン授業を強いられ、対面での深い学びができない状況にあった。さらに、大学祭や学外研修を初めとするさまざまな行事が中止となり、留学生たちが見聞を深めたり、体験しながら学んだりする機会も失われていった。2021年11月頃より、感染の収束が見られる中で対面授業が再開され、高大連携や学内連携という比較的狭いエリアでの交流を始めることができるようになった。

日本人大学生と外国人留学生の「学び合い」については、『『京都のプロフェッショナル』に学ぶ取材プロジェクト』『ソーシャルマーケティングに関する合同授業』『異文化間コミュニケーションの学びの共有』『哲学カフェ』（岡田・中村 2016）、『外国籍教員へのインタビュー・記事作成・発表』（根本・竹田・山崎 2013）、『ワールユースミーティング』『国際フィールドワーク』（カースティ祖父江 2020）などの先行実践例があり、これらの研究の中には「現行の科目の中で何ができるか」を追究しているものもある。しかしながら、高校生と大学で学ぶ留学生との「学び合い」を取り上げた研究は数少ない。

本論文では、高校生も含めた日本人学生と外国人留学生との交流による「学び合い」を生かした異文化理解教育のあり方について考察する。

## 2. 日本人高校生の海外留学・海外研修旅行の状況

日本人高校生の海外留学者は、2017年度に4.7万人を越え、政府も「第3期教育振興基本計画」<sup>1)</sup>において、2022年度までに6万人の数値目標を掲げていたが、この新型コロナウイルス感染症拡大の中で、達成が難しい状況にある。また、日本人高校生の海外研修旅行（人数）について、2017年度は179,910人であったが、2020年度以降は、ほとんどの学校で中止を余儀なくされている。公益財団法人日本修学旅行協会が行った「2020年度全国修学旅行調査」<sup>2)</sup>において、新型コロナウイルス感染収束後の「海外教育旅行」を再開するかどうかにあつての調査では、中学校で再開意向ありが40%、意向なしが40%、未定が20%、高等学校で再開意向ありが60%、意向なしが15%、未定が25%となっている。新型コロナウイルスが収束しても、研修旅行は海外から国内にシフトする予定の学校が数多くみられる。各学校では、海外研修旅行による異文化交流や異文化理解に変わるプログラムを模索している状況にあり、こうした中、高大連携の一環として、留学生を抱える大学の別科として高校生の異文化理解教育に関わることができないかと考えた。

## 3. 高大連携による異文化理解教育の取組

### (1) 高校生の国際化に対する意識調査

異文化理解教育を主題とした高大連携を進める上で、高校生がグローバル化の中で大学教育に何を期待しているのか、その実態を把握するために、岐阜総合学園高等学校の国際文化系列 70 名の生徒に、グローバル化や国際化に関する意識調査を実施した (2021.6)。

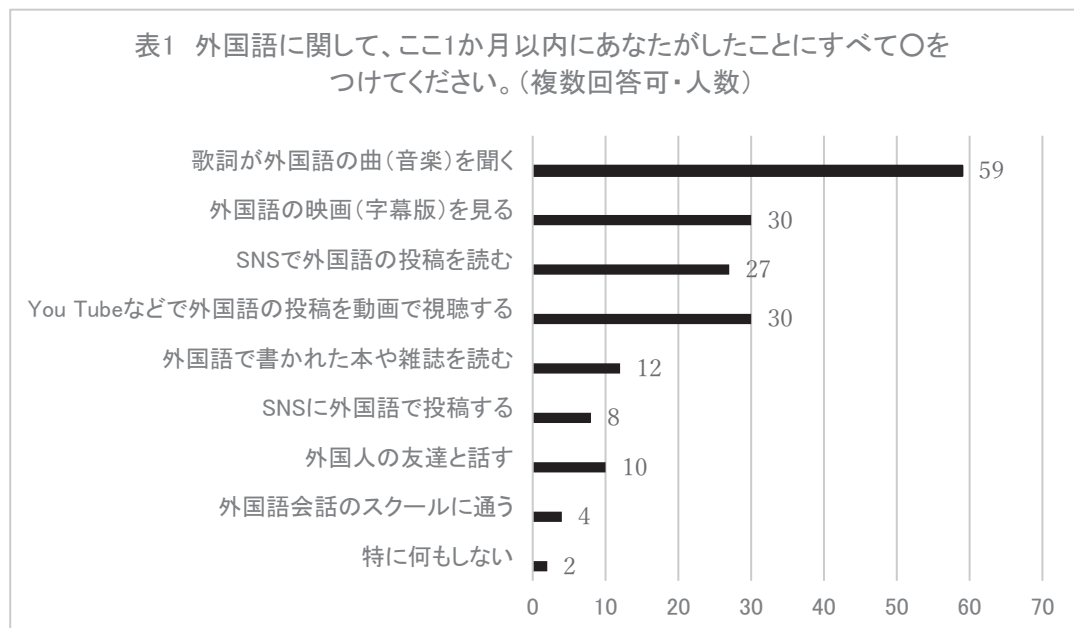


表 1 の結果から、コロナ禍であっても、インターネットの普及によって、手軽に、さまざまな形で外国語に触れる機会が多くなってきていることが読み取れる。

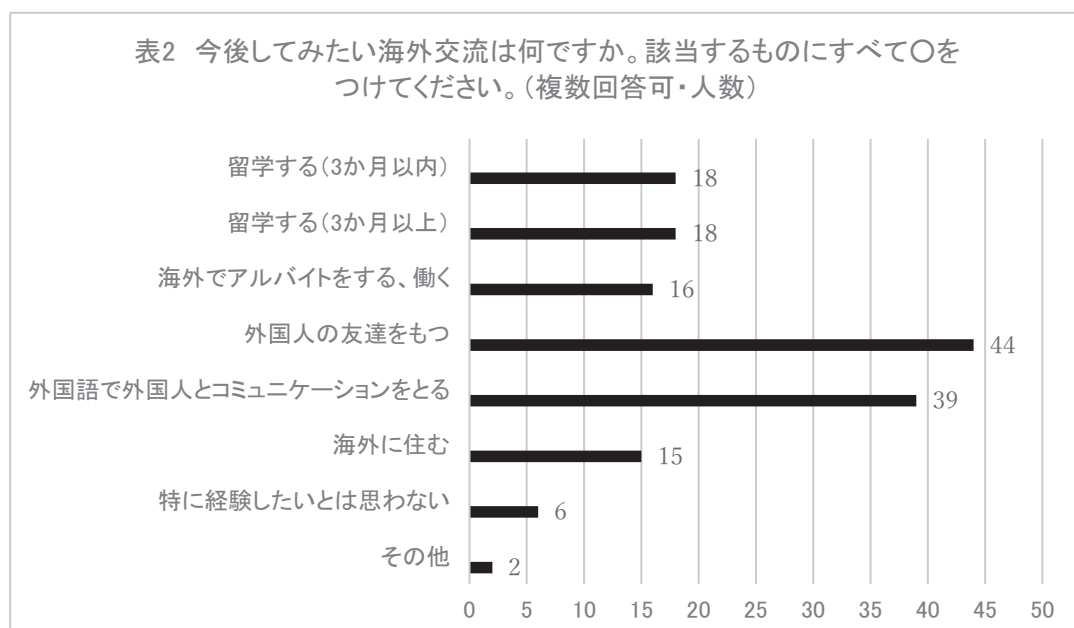


表2では、「外国人の友達をもつ」、「外国語で外国人とコミュニケーションをとる」と回答した生徒が多く、新型コロナウイルス感染拡大もあって海外留学よりも身近なところにいる外国人と気軽に話ができるような環境作りが求められていることがわかる。

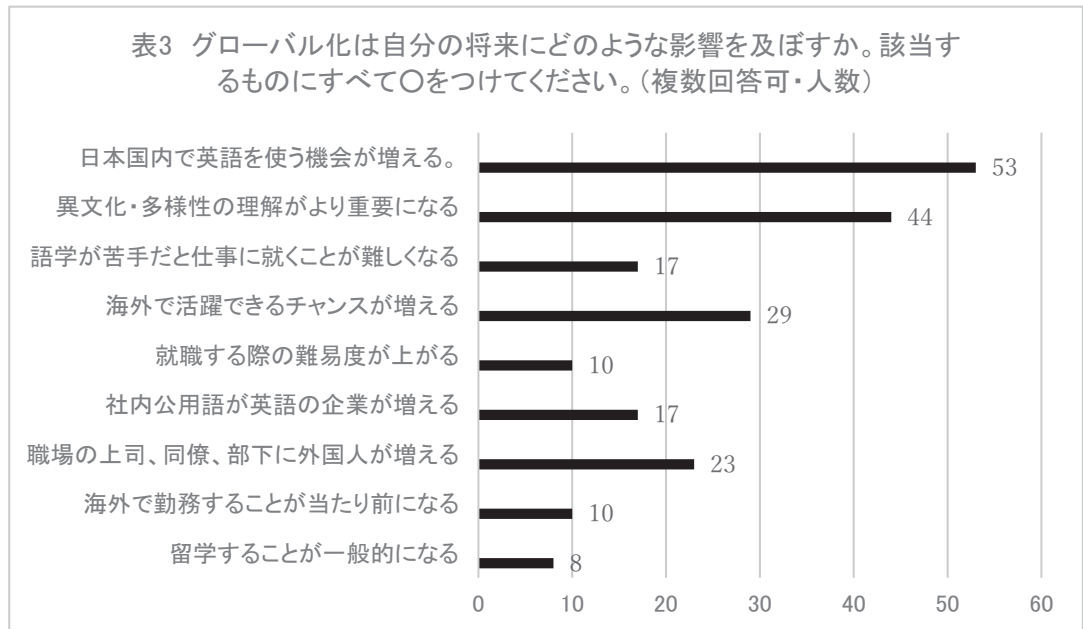


表3では、「英語を使う機会が増える」が一番多いが、次いで、「異文化・多様性の理解がより重要になる」と回答した生徒が多いことがわかる。

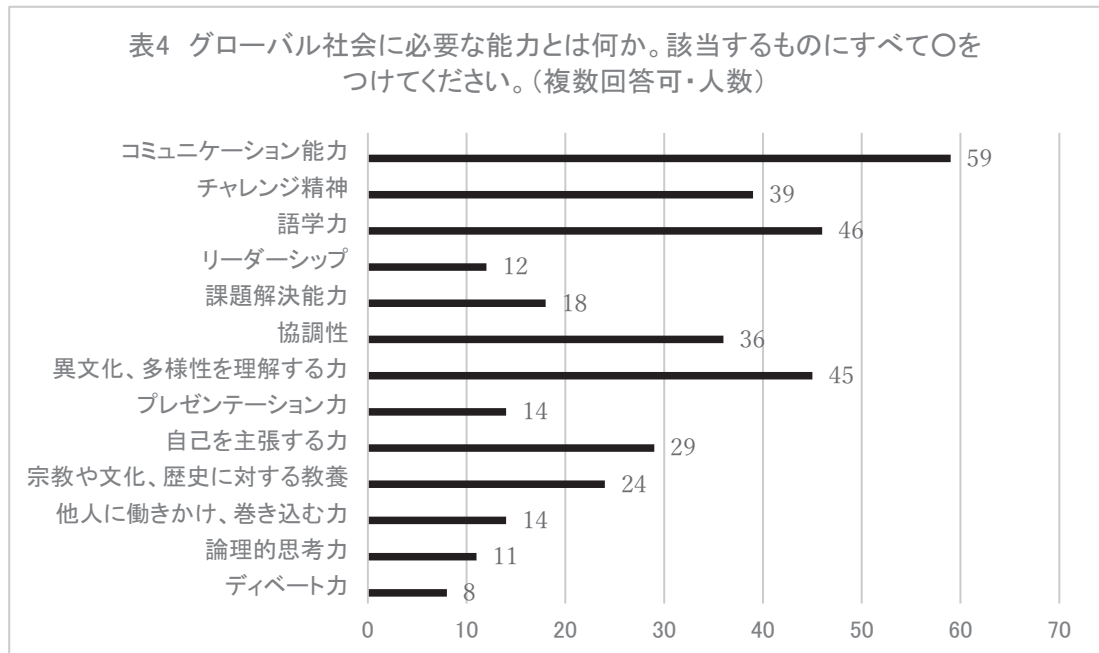


表4では、「コミュニケーション能力」、「語学力」が高い数値を占めているが、次いで「異

文化、多様性を理解する力」が求められていることがわかる。

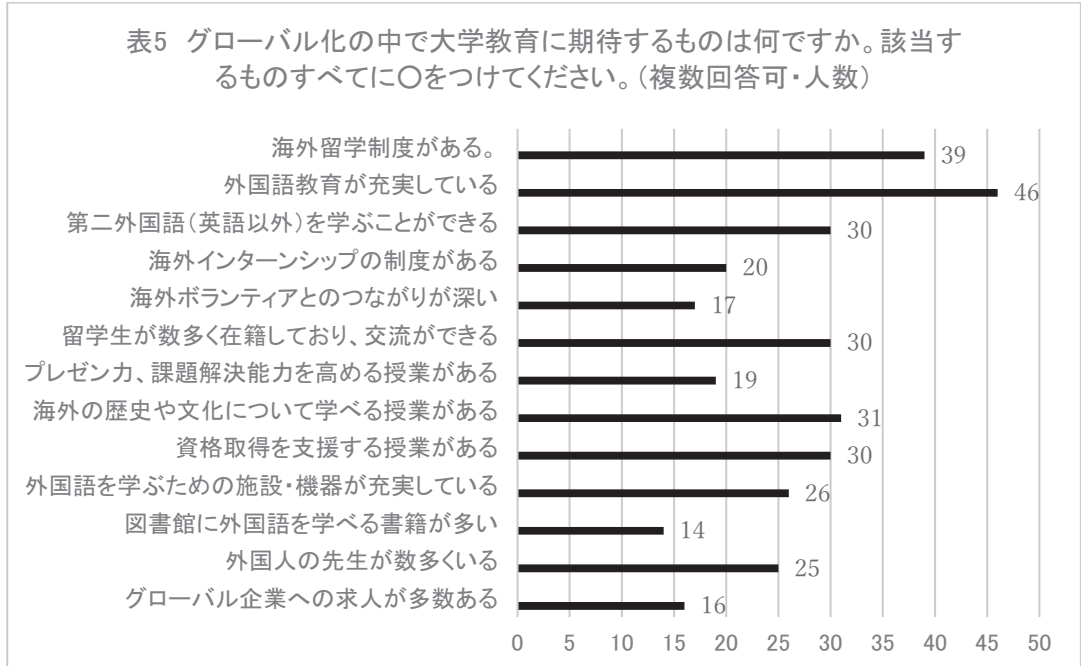


表5では、高校生が、大学教育に期待するものとして、「外国語教育が充実している」という回答が最も多かったが、「留学生が多く交流できること」も多数を占めている。しかしながら、実際の大学教育の中で、大学生と外国人留学生が交流する機会は乏しく、ましてや、異文化間の価値観を交えた議論など、異文化、多様性を理解する力を育むような取組は行われていないのが現状である。これは、留学生の数が増えれば解決できるという問題でもない。

一方、高校生と日本人学生との交流はどうかというと、本学でも「高大連携」の名のもとで、さまざまな方面からの交流が進められている。そのため、その一環として高校生と外国人留学生との交流は容易にできると考え、近隣の高等学校と本学留学生別科との連携による異文化や多様性を理解する教育を始めることとした。

## (2) 高校生向け講演会

筆者は、岐阜総合学園高等学校から、国際理解教育に関するテーマでの講演の依頼を受け、2021年6月28日、国際文化系列2、3年生70名の生徒を対象に「多文化共生社会を生きる」と題した講演を行った。岐阜総合学園高等学校では、海外研修旅行が中止となる中、それに変わる国際理解教育を実施しており、講演会はその一環であった。講演では、「エスノセントリズム



ム（自民族中心主義）」や「ステレオタイプ」に陥っておる現状を抜け出し、「文化相対主義」の立場に立ってこれからのグローバル社会を生きることの大切さをワークショップ形式で訴えた。

### （3）高校生と留学生との交流

2021年12月6日、岐阜総合学園高等学校において、本学留学生別科生（すべてベトナムからの留学生）16名と岐阜総合学園高等学校国際文化系列の3年生40名との間で交流会を実施した。お互いの挨拶と自己紹介のあと、グループに分かれて、高校生の案内で校舎を見学しながら交流を深めた。日本とベトナムとの学校や生徒の違いを意見交換するなど、両者にとって、新鮮で刺激的な交流会となった。

留学生の事後アンケートでは、高等学校に対して、「学校の規模が大きく施設が充実していた」、「生徒数の多さに驚いた」、「ベトナムの高校とは大きな違いがあった」などの回答が、高校生に対しては、「高校生はやさしく親切であった」、「質問に対して丁寧に答えてくれた」、「高校生から大きな刺激をもらった」、「このような機会が持ててよかった」などの回答が得られた。そのうちの自由記載の感想を1つ紹介する。

グループの男子たちが、ベトナム語を勉強してきて、私たちにベトナム語であいさつしてくれた。また、積極的にベトナムのことについて質問し、メモをとっていたので驚いた。私たちの質問にも丁寧に答えてくれた。大変楽しくまた、来たいと思った。

この感想から、日本の高校生がベトナム語やベトナムの事情についてあらかじめ勉強してきてくれたことに対して、留学生たちが感激していることがわかる。高校生側からの歩み寄りにより、交流が深化していくことが読み取れるのである。今回のこの企画は、高校生にとっても海外研修旅行が中止となる中で大変有益なものとなった。以上のように、高校生と外国人留学生との交流会は、互いの異文化への関心を高め、文化の違いを知り、認め合う機会となった。



#### 4 日本人大学生と留学生別科生との交流

先のアンケート結果（表1～表5）から、グローバル化の中で、高校生たちは「外国人の友達をもつことが必要」、「外国語で外国人とコミュニケーションをとることが大切」、「異文化、多様性の理解がより重要」と考えている。また、大学教育に対しては「留学生が多く交流できる環境」を求めている。このようなニーズに対して、大学において、日本人学生と外国人留学生との交流を促進し、異文化理解教育を行っていく必要性があると考えられる。

加賀美常美代は、「日本人学生と留学生とが自然な形で異文化間接触が行えるような、異文化間交流の継続的な場を設定すること、自由で自発的な交流、支援活動が行えるような、異文化間交流、支援活動が行える社会環境作り、組織・制度作りを目指していくこと」を課題として挙げ、そのため教育的介入の必要性を主張している（加賀美 1999）。

また、岡田彩、中村伊都子は、「異なる文化背景を持つ『日本人学生』と『外国人留学生』は、学びを生み出し深め合える『他者』として貴重な存在である。外国語運用能力のみならず、異文化理解、異文化間コミュニケーション力、異文化間トレランス、チームワーク、社会性、学習意欲の向上など、様々な学びの促進が期待される。外国人留学生にとって、日本人学生との交流は、留学を通してしか得られないかけがえのない機会であり、日本人学生にとっては、日本のキャンパスに居ながら国際感覚を養うことのできるチャンスである。」と主張している（岡田・中村 2016）。

このような交流の有益性からも、日本人学生と留学生がお互いに「学び合える」場を教師側が設定していくことが大切といえる。ここでは、特別なプログラムを設定するのではなく、本学留学生別科の既存のカリキュラムの中で、日本人学生の協力を得ながら異文化交流を進めていった事例を紹介する。

##### (1) 留学生別科での取組

日本事情科目「異文化理解」（担当 梶原）では、留学生たちがお互いの国の立場や信条から意見交換を行い、考え方や視点の相違を認め合うことで、自分の視野を広げ多角的に物事を考える力を養っている。この授業には日本人学生2名が常時参加し、さまざまな事例に対して、「日本人なら、どのように考えるか」という観点で意見を述べている。日本人教師の視点ではなく、同じ若者としての視点で話をしてもらうことで、留学生たちは緊張感を持って授業に臨み、好奇心をそそられている。また日本人学生が真面目に学業に取り組む姿は留学生たちのよき手本となっている。



総合演習「キャリアデザイン」の授業（担当長尾、新井）では、日本の新聞を使った学習に取り組んでいるが、留学生16名に対して、日本人学生7名を留学生の各グループに配置

して、サポーター的な役割を果たしてもらっている。この授業は、留学生たちが3~4名のグループを作り、グループごとに新聞記事の中から興味をもったものを切り抜き、模造紙に貼り付け、コメントを書いて全体の場で発表するという形式で行っている。そのコメントを書いて発表をする際に、留学生だけでは、日本の新聞記事を十分に読みこなすことができないため、日本人学生が発表用の「やさしい日本語」に置き換えるためのアドバイスをしている。また、それぞれの発表に対して、日本人学生が個別に評価を行う。今回の評価では、「海外と日本のスポーツを比較して調べているところがよかった」、「主語と述語がわかりやすく聞きやすかった」、「新聞の内容だけでなく自分の意見をしっかり述べている点がよかった」、「発音が上手で内容がよくわかった」などの感想が出された。一方、留学生の事後アンケートでは、「優しく丁寧にアドバイスをしてもらえるので、よくわかった」、「大学生と話す機会ができてうれしかった」などの声を聞くことができた。



なお、両授業とも、日本人学生はボランティアという形での参加であるが、ほとんどの日本人学生が将来、教師を目指しており、「教え方」を学ぶという点で、参加することの意義を感じている。

このような「学び合い」の授業では、留学生に活躍の場を多く与えられるような課題を取り上げる必要がある。また、留学生が「世話される」対象でなく、自らが中心となって活動することが大切であり、それによりモチベーションも上がり自信にもつながっていく。新聞を活用した授業においても、あくまでも主体的に判断していくのは留学生とし、「世話される」という意識をなくすことに配慮しながら授業を展開したことで、留学生たちの自己肯定感を高めることができた。

## 5 まとめ

今回の研究では、身近なところから高大連携や学内連携に取り組むことで、日本の高校生や大学生と留学生との「学び合い」を促進することができた。この実践を通じて、今後、考慮していかなければならないこととして、両者の「学び合い」の中で、それぞれが「学び合い」を通して求めているものに違いがあるということを確認しておく必要があるということである。岡田・中村も、「日本人学生が、留学生とともに何らかの活動をするというだけで満足度が高い一方、まさに異文化の中で日常生活を経験している外国人留学生は、日本人学生との単純な接触を越えた、深い学びを期待しており、これを教育実践に反映する必要性が明らかになった」と述べている（岡田・中村 2016）。



高校生と交流をした際の留学生アンケートで、日本の高校生が真面目に勉学に取り組んだり、学校生活を送ったりしている姿に大いに刺激を受けたという感想が多かったが、交流だけを目的とするのではなく、お互いが課題に取り組む姿勢や取り組む方法、お互いの文化の違いを認め合い、尊重する態度などを学ばせていくことを目標に設定する必要がある。高校生との交流において、高校生がベトナムの挨拶を勉強し、ベトナムのことについて質問したことに留学生が感激し、両者の関係が親密になっていったことが、そのよい例である。今後は、こうした「学び合い」の質を高めることを主眼にして研究に発展させていきたい。

## 注

- 1) 第3期教育振興基本計画（本体）（[mext.go.jp](http://mext.go.jp)）（最終閲覧日 2022. 1. 24）
- 2) 「新型コロナウイルス感染症の影響に関する調査まとめ（抜粋）」  
202111080931263655.pdf（[jstb.or.jp](http://jstb.or.jp)）（最終閲覧日 2022. 1. 24）

## 参考文献

- 加賀美 常美代 (1999)「大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入」(『コミュニティ心理学研究 1999』 第2巻第2号 131-142)
- 根本直弥、竹田稔史、山崎瑞紀(2013)「留学生と日本人学生の交流促進のための教育プログラムの設計」(『東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』 2013. 4 第14号)
- 岡田彩、中村伊都子 (2016)「日本人学生と外国人留学生による「学び合い」の促進-同志社大学政策学部と京都アメリカ大学コンソーシアム (KCJS) の協働から-」(『同志社大学学習支援教育開発センター年報』 89-102 2016.6.30)
- カースティ祖父江 (2020)「留学生との接触による日本人学生の「多文化」に対する意識変化-国際福祉開発学部の取り組みからの一考察」(日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要-現代と文化』第141号 2020年9月)

(朝日大学留学生別科長)